

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

西部のアポカリプス的物語：Blood Meridianの廃墟を読む

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2025-03-17 キーワード (Ja): Cormac McCarthy, Blood Meridian, 米墨戦争, テキサス, アポカリプス的物語 キーワード (En): 作成者: 山本, 祐子 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学短期大学部
URL	https://doi.org/10.18956/0002000317

西部のアポカリプスの物語

— *Blood Meridian*の廃墟を読む —

山 本 祐 子

要 旨

Cormac McCarthy の *Blood Meridian* は、近代アメリカ文学の最高峰として不動の地位を得ている。しかしながら本書に対する批評は始まったばかりで、多くの疑問が残っているのも確かだ。その最たるものが、本書の残虐性である。凄惨な殺戮場面ばかりを繰り返し描く作者の意図を巡って、批評家たちは明確な答えを導き出せずにいた。この疑問に対して、本論では、*Blood Meridian* をアポカリプスの物語として読むことで答えるものである。本書は、南西開拓期「正史」のもと隠されてきたアメリカ合衆国の拡張主義とその残虐性を示し、民主主義国家の欺瞞を暴くことだけが目的では決してない。むしろ19世紀イギリス・ロマン主義文学の伝統を受け継ぎ、アメリカを含む巨大文明の終焉を予言するかのような啓示（アポカリプス）として読むとき、そこには国家・政府・人類全体への深い哲学が反映されていることを明らかにしたい。

キーワード：Cormac McCarthy、*Blood Meridian*、米墨戦争、テキサス、アポカリプスの物語

はじめに

1985年に出版された Cormac McCarthy の *Blood Meridian or the Evening Redness in the West* (以後、*Blood Meridian* と表記)¹⁾ は、底知れぬ異様さをたたえた、実に不可解な小説である。アメリカ開拓時代の西部を舞台とし、実在した悪名高い傭兵集団 Glanton Gang が、行く先々でインディアンとメキシコ人を殺戮していく路程（1849年から50年にかけて）を史実に沿って淡々と描き続けていくからだ。そこには作者のフィクションや想像も多分に加えられているが、Gang らの悪逆非道は当時の現実を正確に反映させたものであり、この不条理な現実を、義憤や絶望といった感傷を差しはさむことなく粛々と伝えるだけなのである。しかも、実録を扱っていないながら、テキサス以西の風景は幻想的に描かれ、哲学的なセリフや文章も多い。このように *Blood Meridian* は、救いのない筋骨きと、得体の知れない雰囲気、難解な文体が加わって、出版された当初は酷評され、売り上げも振るわなかった。ところが、いまや McCarthy は現代アメリカ文学を代表する作家のひとりとされ、本作品は彼の最高傑作として不動の地位を得るようになった。

その理由は、ひとつに、西部開拓期のアメリカを捉えた壮大な歴史小説であったことに読者が気付き始めたからであろう。山口和彦の弁を借りるならば、同書はすでに「アメリカ南西部正史への対抗歴史として、またはホメロス、シェークスピア、メルヴィルらの作品に比する叙事詩的物語として高く評価され」るまでになっている（『コーマック・マッカーシー』122）。確かに開拓期を理想化する「南西部正史」のもと、ひた隠しにされてきたアメリカの実態が、本書においてさらけ出された意義は大きい。とはいえ、そこに告発の意図が示されているわけでもなく、ただひたすら殺戮場面を繰り返し、テキサス以西をまるで地獄のごとく描き出した作者の意図を巡って、研究者たちは悩まされてきた。

そこで本論では、*Blood Meridian* をアポカリプスの物語として読むことで、先の疑問に対するひとつの解答を示すものである。アポカリプス小説といえば、終末ものと呼ばれており、天変地異や戦争などで人類が滅亡する未来や架空の世界を描いていることから、ディストピア小説の一分野とされている。しかし本論で言うアポカリプスの物語とは、「バベルの塔」や「ソドムとゴモラ」のように、ある栄華を誇った文明や民族が、何らかの圧倒的な力によって、なす術もなく、ときには一夜にして、滅ぼされた過去を伝えるものだ。いわば、滅亡の記憶である。アポカリプス小説は、壮大な想像力をもって廃墟と化した終末の世界を描くが、これはやはり架空の話である。しかしアポカリプスの物語は、つまり *Blood Meridian* は、終末を思わす絶望的な風景で読者を圧倒するが、こちらは史実に基づいている。この夢か現か計り知れないアポカリプスの物語を、19世紀ロマン主義文学の伝統にまでさかのぼって考察し、人類全般に向けた作者の思索として読み取ってみたい。

1. 主人公 “kid” の正体

McCarthy は *Blood Meridian* を執筆するにあたって、当時の膨大な記録を調べ上げ、実際に Glanton Gang と接触のあった同時代人たちの体験談を元に、緻密かつ重層的に物語を織り込んでいった。ところが小説内では、歴史的な解説は一切なされず、建物や人の営みを通して、あるいは登場人物たちの口からふと出たセリフから、それとなく当時の社会的背景を読者に推測させていくばかりだ。そこで本論ではまず、登場人物たちと、彼らを取り巻く情勢を、文献資料や記録を元に肉付けしていくところから始めたい。

同書は、とある少年とともに物語が進んでいくため、この少年が一応主人公とみなされている。しかし名前は明かされず、ときおり “kid” などと呼ばれているだけなので、本論でも “kid” と表記することとする。彼は、歴史的イベントの目撃者という役割を担っているものの、主体性がなく、自分の気持ちや意見を殆ど示さないことから、非常に影の薄い、一風変わった主人公だ。しかし “kid” は、拙論「*Adventures of Huckleberry Finn* における21世紀新解釈への提言」に

において論述したが、*Adventures of Huckleberry Finn* (1884) の主人公 Huck を元にした人物造形であることは間違いない。

Huck は、アメリカ文学史上もっとも愛されてきた登場人物のひとりである。だが、意外と言及されていないことだが、モデルであった実在の少年 Tom Blankenship の家庭環境からしても、Huck は社会問題化していた“squatters”の出であったことは明らかだ。“squatters”とは、貧しい開拓民で、土地を買う資金がないため、放棄された土地や建物を勝手に占有して暮らしを立てていた者たちだ。西部開拓地の拡大とともに流れ込んできた貧民層で、社会の一階層を構成するまでに膨れ上がっていた。彼らは貧困と不安定な生活基盤ゆえ病気がちで酒に溺れる傾向にあり、さらに落ちぶれて“loafers”と呼ばれる厄介な浮浪者になることもある。Huck は、まさにこの“loafers”だった父親と、顔も知らない母親（おそらく売春をしていた女性）との間に生まれ、育児放棄されていたため、浮浪児となって通りで暮らしていた。年齢は14歳ぐらいと言われており、1833～35年ごろに生まれている。

開拓地は構造上、こうした貧困層出身の寄る辺のない児童あるいは浮浪児を抱え込んで拡大してきた。“kid”もそのひとりだ。Huck はミズーリで生まれ育ったが、“kid”はミシシッピ河を挟んだ対岸の州テネシーで Huck とほぼ同時期（1833年）に生まれている。境遇も酷似していた。母親の顔も知らず、育児放棄されていたため文字すら書けなかった。しかも Huck と同じく14歳で父親の暴力から逃れて家出して、Huck と同じようにミシシッピ河に沿って放浪するようになる。ただし Huck は、アーカンソーに流れ着いた時点で物語が終わるため、永遠に14歳のままだ。一方“kid”は、Huck の終着地アーカンソーからさらに南下し、ニューオーリンズまで下りきると、そこからテキサスに入っている。つまり“kid”は Huck と同じ人生を歩み、途中で終わった Huck の旅を引き継ぐようにして、西へと流れていくのである²⁾。

こうして“kid”が、テキサス第二の都市サン・アントニオに流れ着くのは、1849年のことで、16歳になっていた（地図一を参照）。そこで“kid”は、疲労と喉の渇きに耐え切れず、メキシコ人が経営する酒場に飛び込んで、酒を恵んでほしいと頼む。金はないから代金として掃除をすると、バーテンダーが断るのも聞かず、無理やりほうきを取って掃除を始めたのである。それでも追い払おうとするバーテンダーに、酒のボトルで頭を殴りつけ、その割れた先端を目に突き刺すと、別の酒を奪って酒場を後にする（27）。16歳の少年が唐突に酒を恐喝し、拒まれれば攻撃するというやり方に、言葉を失う読者も多いだろう。不自然とすら感じるかもしれない。

しかし西部の“squatters”や“loafers”のなかには、暴力や犯罪で身を立てている者も多く、特に“loafers”は徒党を組んで一般家庭に押しかけて食べ物や金銭をゆすめるため、社会問題にまでなっていた。Huck の父親もそうしたひとりであると同時に、アルコール中毒の狂暴な男だった。“kid”の父親は教師だったが、酒で身を持ち崩し、酔っては暴れていたようである。こうした環境のせい、か、“kid”もまた幼い頃から、“in him broods already a taste for

mindless violence” (3) であったという。家出してからは荒くれたちに交じって酒と喧嘩に明け暮れるようになり、テキサスにたどりついたころには、典型的な“loafers”になってしまっていたのである。そこへ私設部隊の軍曹が、酒場での暴力事件を聞きつけて“kid”をリクルートしにやってきた。住むところも金もない“kid”は、誘われるまま入隊してしまう (31)。

Huck は、父親を反面教師とし、酒と暴力を毛嫌いし、奴隷 Jim を救おうとした心優しい少年であった。だからこそ開拓期におけるアメリカ少年の原型とされ、自由と民主主義の象徴として愛されてきた。その分身ともいべき“kid”は、名前すら明確でないことから推測できるように、開拓地に埋もれた、その他大勢の貧しい少年たち、あるいは Huck たちのひとりという位置づけである。だが“kid”は、Huck と異なって、父親と同じく酒と暴力に溺れ、傭兵業へと足を踏み入れてしまう。貧困層“squatters”に限って言えば、Huck よりも“kid”のほうが大多数であり、知られざるアメリカ少年の典型像としてふさわしかったと言わざるをえない。

2. 米墨戦争と義勇兵³⁾

Blood Meridian では年代だけを提示するばかりで、一切触れていないが、“kid”がテキサスに入る前年に米墨戦争 (1846-48) が終結しており、このことが“kid”の人生を決定づけていくこととなる。19世紀初め、西部開拓地では歴史上類を見ない移民流入と膨張が続き、さらなる領土拡大の機運が高まるなか、アメリカ政府はテキサス革命 (テキサス独立戦争、1835-36) を支援し、テキサスをメキシコから独立させたのち、併合してしまう。そしてさらなる領土拡大を狙ってメキシコに戦争を仕掛けた。これが、米墨戦争である。

そのうえで政府は、侵略戦争とのそしりを避けるため、開戦と同時に義勇兵を募って、アメリカ総国民を戦争に巻き込んでいく。義勇兵とは、一般市民に、無報酬で従軍を求めるものである。軍服もなく、武器や馬すら自前で参戦しなければならない。それでも「義勇兵とは見返りを求めず、ただひたすらに国家に尽くす義勇・美徳の兵」だと称賛する風潮が政府主導で高められ、この栄誉を求めて、南部を中心に多くの青年たちが志願してきた。資源に乏しい辺境地の若者たちにとって、従軍は社会階層を昇るための数少ない手段だったのである。しかも食事は賄われ、バウンティー・ランド (報奨地) という恩恵もある。Paul Foos の *A Short, Offhand, Killing Affair* によると、当初の志願熱が下火になると、義勇軍のリクルーターたちは、酒場や刑務所まで回って、占領地の略奪や土地投機の旨味をほめかしつつ、勧誘したという (516)。実際に略奪目的で戦地に向かう者も現れ始める。“squatters”や“loafers”のような極貧の者にとって、あるいは暴力を生業としている者にとって、戦争は貴重な収入源となっていたのである。

この結果、全米で累計7万3千人強が義勇兵としてメキシコの戦地に向かった。これとは

別に戦地入りした正規兵2万7千人を合わせると、延べ10万人のアメリカ人がメキシコに入ったことになる。アメリカとの国境に面するチワワ州の人口が16万人であったことを考えると (Foos, 85, 151)、アメリカ市民による民族大移動と言えるだろう。そしてアメリカ合衆国は、メキシコに勝利すると、テキサス西域に広がる広大なメキシコ領を割譲させ、北米の覇権を完全掌握したのである。このとき得た地域は、現在のアメリカ領土の約三分の一にあたることから、米墨戦争はアメリカ合衆国による北米覇権の最大にして最終局面であったわけだ。同時に、合衆国という巨大文明が勃興したことを世に知らしめた戦でもあった。

ところが戦争が終わると、義勇兵のなかで復員することも、社会復帰することもできない者も現れ始める。言うなれば、義勇兵くずれである。ところで *Blood Meridian* では、「義勇兵くずれ」などという言葉は登場しないうえ、これにあたる英語も存在しない。そもそも、政府は、プロパガンダの一環として、義勇兵をアメリカ人の理想像として提示してきたのだから、その理想像がくずれる姿を認めるはずがなかった。明らかに社会を蝕む危険分子となっていたにもかかわらず、黙殺されてきたのである。そこにメスを入れたのが、*Blood Meridian* であったと本論では考えている。McCarthy は、義勇兵くずれにあたる用語を造ることも、その存在を明確化することもなく、これまで指摘もされてこなかったが、彼の小説はもはや義勇兵くずれの物語であった。正確には、テキサスに巣食う義勇兵くずれの物語である。

実際に“kid”は、サン・アントニオで大勢の義勇兵くずれに出会っていく。彼らの出身はテネシー、ミズーリ、アーカンソー、ケンタッキー、ミシシッピ、ルイジアナ、テキサスと多様であるが、一様に、不名誉除隊や脱走あるいは犯罪など、様々な事情で故郷に帰れない連中ばかりであった。彼らはひどく粗野で、出身ごとに異なる方言や俗語を語り、“Aint that the drizzling shits Don't start no more of that crazy shit” (95) というように口汚い。日本人にはこれだけでも読みにくいところであるが、加えて、元メキシコ領だった名残りで、メキシコ系住民はスペイン語で話しており、そのセリフが小説をさらに読みにくくする。だが、スペイン語訛をはじめ、多種多様な方言・俗語が飛び交う混沌としたセリフからは、テキサスがアメリカ最果ての州にして、犯罪者や“loafers”が全米から流れ着く先であり、復員できない義勇兵くずれたちの吹き溜まりとなっていたことが、体感的に伝わってくる。当時の合衆国は東部を中心に高度経済成長を遂げ始めており、これら豊かで安定した他州と違って、テキサスは戦後の荒廃と暴力が広がる異質な空間として提示され、まさにアポカリプスの物語にふさわしい舞台として浮かび上がってくる。

この地にて“kid”は、先にも述べたように、誘われて私設部隊に入ることになる。これが、義勇兵くずれを集めて編成された即席部隊で、指揮官の White 大尉は、戦争がすでに終わっているにも関わらず、この部隊を率いて、メキシコのソノラに遠征するのだと息巻いていた。今こそ国のために戦わなければならないのだという。しかし後で分かるのだが、彼の部隊は、

ひとたびテキサスの国境を越えて、メキシコに入った時点で、“filibuster”という違法な武装集団となってしまう。“filibuster”とは、戦争終結後も、敵国に侵犯して、領土の拡大をもくろむ私設部隊（あるいは政府の隠密部隊）を意味する。John Sepich によると、この White 大尉の部隊は小説上のフィクションであるが、実際に元軍人が自主的に部隊を組織して（つまり勝手に義勇兵くずれを集めて）、メキシコ領に侵攻し、領土の収奪に成功していたことが記録に残っている。カリフォルニア州政府も、さらなる領土拡大の思惑から、私設の“filibuster”軍を非公式に支援していたが、政情が変われば、アメリカ・メキシコの両国で逮捕される危うい立場でもあったという（20-21）。

それでも White 大尉は、“kid”に向かって、遠征の旨味を説く。報酬はないが、略奪地の分配があるから問題ない。豊かな草原だからな、ひとかどの地主になれるぞ。若いのだから、一旗揚げたいだろう、と畳みかけてくる。しかし米墨戦争時代の甘い宣伝文句を繰り返す White 大尉は、最後に本音を漏らす。終戦条約に触れ、義勇兵たちは命がけで戦ってきたのに、政府に裏切られた、見捨てられた、と声を張り上げる（37）。要するに、兵士を差し置いて勝手に戦争を終わらせたと憤るのだが、その姿からは、戦争の栄光が忘れられず、戦争しか生きる術を知らないまま、戦争という居場所と旨味を奪われた義勇兵くずれの、やるせない怒りが読み取れる。

この後、White 大尉の“filibuster”軍はメキシコに入り、ソノラに向かう途中で、アパッチ族に襲撃され、ほぼ殲滅させられる。なんとか生き延びた兵士たちも、逃げ落ちる途中で、メキシコ人に処刑されたようである。近くの町に White 大尉の首がさらされていた。作者の McCarthy は、“filibuster”たちの、熾烈だが、あっけない最期を描くことで、戦後のテキサスに取り残された義勇兵くずれが、歴史の波に淘汰されるように、滅びゆく運命にあることを暗示していた。その暗示を裏付けるかのように、小説の主軸として、実在の傭兵部隊 Glanton Gang が登場してくる。McCarthy は、当時の記録を丹念に拾い集め、多少のフィクションと想像を織り交ぜつつも、史実に沿って、彼らの破滅までの軌跡を描いていくのである。

Gang の指揮官 John Joel Glanton (1819-50) は、小説では全く触れられていないが、テキサス独立戦争と米墨戦争で Texas Ranger として戦った義勇兵で、その残虐非道な戦いぶりから、伝説化され、語り伝えられるようになった人物である。アメリカ開拓期の民間伝承では、こうした実在の、しかも残忍な義勇兵や強盗を、主人公に据えて、英雄化する傾向がある。この悪人を崇拜するような開拓期独自の伝統については次の論文にて扱うものとするが、この伝説的な人物を扱っているがゆえに、*Blood Meridian* は「叙事詩的物語」と言われてきたのである。しかし現実の Glanton は、伝説というよりは、むしろ戦後に残る典型的な義勇兵くずれであった。16歳から戦争で身を立て、米墨戦争中に殺傷事件を起こしてテキサスを追われると、戦後は自分と同じような義勇兵くずれを集めて傭兵部隊を組織し、メキシコのチワワ州と契約を結んで、インディアン討伐に出る。彼もまた戦争以外に生きる術を知らなかったのだ。チワワで

は相次ぐアパッチ族の襲撃により疲弊しており、インディアンの頭皮ひとつにつき一定の報奨金（小説では100ドルと記されている）を支払うと約束して、かつての敵である Glanton Gang を歓迎したのである。政情によって敵味方が入れ替わるというのも、傭兵の特徴である。

先の“filibuster”とともに従軍していた“kid”は、アパッチ族の襲撃から奇跡的に助かったものの、落ち延びた先でメキシコ軍に捕らわれて、チワワの刑務所に連行されていた。その刑務所に、折しも Glanton が戦争慣れした兵士を調達しにやってくるという設定だ。そこで“kid”は拾われて、傭兵部隊 Glanton Gang に加わることになる。“kid”とともにリクルートされるのが、HT（Horse Thief）の焼印を額に押された馬泥棒の Louis Toadvine と元義勇兵の Grannyrat Chambers である。彼ら3名は、架空の登場人物ではあるが、メキシコの刑務所で暴力的な荒くれを選りすぐってリクルートするという点は、米墨戦争当時のみならず、戦後の傭兵部隊の定石であったことは間違いない。暴力的な人間ほど、戦闘に適しているからだ。

以上のように、小説上でも、史実においても、Glanton Gang はならず者の集団でしかなかったが、脱走兵を処刑するシステムを含め、実は軍隊組織の形式を留めていた。つまり米墨戦争などに従軍したことにより、軍隊組織の兵法や戦闘技術を叩き込まれ、大勢の敵を、効率的かつ迅速に殺していく戦争の術を獲得していた。小説では、斥候を用いた地の利の計算や、陣の敷き方まで具体的に書かれている。Gang たちがインディアンや民間人までを情け容赦なく次々と殺戮していく様子を見せつけられると、彼らが、衝動的な快楽殺人鬼ではないかといぶかしむ読者もいるだろう。しかし軍隊はそもそも大量殺戮を効果的に行うよう編成されたものであり、それを踏襲する Gang たちは、傭兵業のプロとして効率的に人を殺していたことになる。

ただし Gang たちは、通常の軍隊とは異なり、非武装のメキシコ人まで攻撃していく。米墨戦争における義勇軍も、正規軍と違って指揮系統がゆるかったことから、政府や軍当局からの指示や戒律に従わず、メキシコの非戦闘員や女子供まで攻撃することが度々あった。義勇兵による当地での略奪や残虐行為は、強姦を含め、熾烈を極めていたことが記録に残っている⁴⁾。小説ではこうした背景を説明することはないが、アメリカ人読者のなかには察する者も多いことだろう。要するに Glanton Gang は、戦時中の義勇兵たちが行っていたことを引き継いだだけであり、彼らはアメリカの突然変異というよりは、むしろアメリカ市民10万人の成れの果てであった。戦争あるいは時代が彼らを作り上げたと言ってもいい。

そこに、“kid”が入隊して、殺戮者の道を歩んでいくことになる。しかし物語を読んでいくと、彼には選択の余地などなかったことが分かる。育った環境、戦争という時代の波に抗えず、彼が生き延びるためには傭兵になるしかなかった。つまり *Adventures of Huckleberry* の Huck はアメリカの自由と民主主義の象徴だが、*Blood Meridian* の“kid”はアメリカの覇権主義と侵略戦争の落とし子であった。いずれも19世紀半ばのアメリカを体現した時代の申し子であったと考えると、その対照ぶりは驚愕である。

3. 19世紀イギリス・ロマン派の影響

本論の主旨として強調しておきたいのは、*Blood Meridian* は明らかに19世紀イギリス・ロマン主義の影響を色濃く受けているということだ。文学批評では一度も触れられたことはないが、小説では旅人のことを“pilgrim”（巡礼者）と呼んでおり、旅路にあった“kid”は、後に合流する Glanton Gang とともに、何度も“ruins”（廃墟）に立ち寄っている。つまり、“kid”らは、ある意味で、廃墟巡礼に出た旅人でもあったと本論で指摘したい。

廃墟巡礼といえば、ロマン主義文学を思い出すはずだ。市川順によると、イギリスでは「一八世紀にヨーロッパ大陸巡遊（Grand Tour）の流行により、ローマの廃墟を見てイギリスに帰国した人々が増え、自国にも廃墟を愛する風潮が芽生え」と、廃墟は崇高かつ美学的な景観として人気を博すようになる（『最後の人間』におけるメタ廃墟」26-27）。特にギリシャ・ローマの古代遺跡は、西洋文化の起源として憧憬を集め、古代理想郷へと想像をかきたてた。かくして廃墟は、19世紀のロマン派芸術における主要なトポスとなっていく。なかでも絵画『バベルの塔』のように、荒涼とした風景のなかに佇む廃墟は、巨大文明の破滅を物語るものとして、つまり滅びの表象として威風を放った。

この廃墟趣味を取り込んだ小説が、Mary Shelley の *The Last Man* (1826) である。Mary といえば *Frankenstein* (1818) が有名であるが、*The Last Man* は、英米最初のアポカリプス小説として近年再評価されつつある作品で、2100年に起こった疫病により人類が滅亡するという架空の未来を描いている。物語では、疫病が世界を襲うなか、ギリシャとトルコで戦争が勃発するのだが、この戦争に勝利したのは、阿部美晴によると、死だけであったという。疫病が両軍を減らし、コンスタンチノーブルは「廃墟」と化してしまうからだ。コンスタンチノーブルは、オリエンタリズムの象徴であり、フィルヘレニズム（古代ギリシャ文化を西洋文明の起源であり象徴として尊ぶ思想）との境界を意味する。ここが廃墟になったということは、東西双方の文明が減んだことを象徴的に示していた、と阿部は言う（“Mary Shelley's Heterogeneous Philhellenism in *The Last Man*” 369）。そしてとうとう地上の最後のひとりとなった主人公 Lionel は、ローマ遺跡（廃墟）で佇み、この廃墟を通して過去の文明の繁栄を夢想し、その記録を記すのである。廃墟とは、かつて栄華を誇った文明の象徴なのである。

ところで小説のタイトル *The Last Man* は、世界の終末、すなわちアポカリプスを象徴する用語として、当時の文学的クリシェとなっていた⁵⁾。これをアメリカで踏襲したのが、James Fenimore Cooper の *The Last of Mohicans* (1826) である。アポカリプスとは、当然ながら『ヨハネの黙示録』を原典としており、地上の王国は滅亡すると、キリストが再臨し、最後の審判前日までの千年間（ミレニウム）はキリストがこの世を統治するというものだ。この黙示録のシナリオに沿って、ロマン派詩人たちは終末を夢想し、その後に訪れるミレニウムを、つまり

正義と平和で満ちた理想の社会に想いを馳せ、あるいは来るべき理想の社会を信じ切れずにもがいた、と Morton Paley は説明する。そして、このアポカリプス思想は、社会運動家にまで影響を及ぼし、破壊の後の再生を尊ぶ風潮をもたらした。例えば Richard Price (1723-1791) は、フランス革命とアメリカ独立革命をアポカリプスだと称賛し、革命により全てを打ち壊した後には共和国という理想の社会が生まれると訴えたという (*Apocalypse & Millennium in English Romantic Poetry*, 1-19)。

明らかに *The Last of Mohicans* は、Price ら同時代人のアポカリプス思想を反映していて、Mohican 族を含むインディアン全体が滅亡した後に、ミレニウム（アメリカ合衆国という理想的な共和制国家）が訪れるという展望が込められていた。しかし彼の小説に、廃墟は出てこない。そもそも19世紀アメリカにおけるロマン派は、絵画を含め、祖国の風景に廃墟を描けなかった。谷川渥によると、「歴史のないアメリカで廃墟を意匠とするにはやはり無理が」あったのだらうとしている（『廃墟の美学』147）。要するに彼らにとっての廃墟とは、あくまでヨーロッパ起源の文明を指し、アメリカ古来の文明を、つまりアメリカ合衆国以前に文明が存在していたことすら認めていなかったことになる。

この点で *Blood Meridian* は、従来のアメリカ文学伝統とは一線を画している。*Blood Meridian* は、アメリカのアポカリプス物語として、幾つもの廃墟を登場させ、北アメリカ大陸においても文明の興亡があったことを、読者に夢想させていくのである。

4. 侵略者たちによる廃墟巡礼の旅

小説で最初に廃墟が登場するのは、“kid” がテキサスのサン・アントニオに入って、酒場で暴れた直後である（地図一）。“kid” は「廃墟となった (ruinous)」教会に身を寄せ、一夜を明かしていた。朝日のもと、見渡すと、教会の床は鳥や家畜たちのフンでうずたかくなっており、聖歌隊の席があった辺りには、何かの動物の朽ち果てた骨が散乱していて、そのうえをノリスがひょこひょことうろついていた。ノリスは、しばらくして奥の聖具室に入っていく。“kid” も後を追って聖具室に入ると、丸天井にはうごめく黒い羽毛（コウモリ）が張り付き、床には質素なテーブルがひとつ置かれていた。そして壁沿いには、子供を含む人間の遺体が、数体、白骨化して横たわっていた。“kid” はそこを通り抜けて、教会内に戻り、改めて見ると、正面のニッチには聖人たちの銅像が並んでいるが、体中にアメリカ軍のライフル跡が点々と残り、耳や鼻も欠けていた。マリア石像の腕には、首のない子供が抱えられていた (27-28)。

先にも述べたが、“kid” は自分の感情を全く示さず、ナレーションは“kid” が目撃したものを無機質に列挙していくばかり。ところが感情を持つ読者は、その無機質な描写とは反比例して、残酷な破壊の跡と不穏な光景に、恐怖が膨らみ、自らの感情や解釈を加えていってしまう。

突如として現れる人骨に、マリア像が抱える幼子イエスの首が銃で撃ち落とされているという衝撃的な姿から、ここが元々カトリック教会であり、おそらくはテキサス独立戦争（1835-36）のおり、アメリカ軍の攻撃を受け、メキシコ人家族が教会の聖具室に立てこもったのであろうことが推測される。神に救いを求めたか、聖域ならば見逃されるかもしれないと思ったに違いない。ところが、教会の聖具室に逃げ込んでしまったがゆえに、そこへ略奪にやってきたアメリカ兵に、子供を含めて皆殺しにされてしまったということは容易に察しがつく。米墨戦争では、Foosによると、カトリック教会は格好の標的だった。マニフェスト・デスティニーは思想的にも政治的にも反カトリック主義と強く結びついていたため、教会を植民地下の墮落した富と権力の象徴であり、民主主義の敵として、根絶やしにすべきだという声が高まっていた。従ってアメリカ軍当局も、義勇兵が農民を攻撃・略奪することには眉をひそめたが、教会を破壊し、貴重な聖具を略奪することは暗黙で認めていたという（127）。全く同じ惨劇が、テキサス独立戦争で起こっていたのである。テキサス独立戦争とは、米墨戦争の前哨戦と言われている。メキシコ領であったテキサスを、そこに住むアメリカ系住民が占有・統治するために起こした領土争いに過ぎないが、このときもアメリカの領土拡大を支持する有志の義勇兵が、民主主義のためという大義を掲げて全米からテキサスへ集まっていた。

つまり教会の廃墟は、かつてテキサスで華やくだメキシコ文化とそこに属する人々が、圧倒的なアメリカ軍力によって侵略・滅亡させられたことを記憶する遺物であった。そしてノリスに導かれるように見つけた人骨は、滅ぼされたメキシコ人たちの最期を伝える媒体となっている。この骨がなければ、滅ぼされていった者たちの死にざまが、無念さが伝わってこない。ただしテキサス独立戦争は“kid”がやってくる13年前である。その間ずっと遺体が放置されていたとは考えにくいことから、ここで見えた人骨は幻想であったのかもしれない。これからも、夢のごとく人骨が忽然と現れ、廃墟とともに重要な意味を持ってくる。

“kid”は、先に述べたように Glanton Gang に合流して、インディアン狩りの遠征に出ることになる。その遠征ルートは、チワワから北上し、アメリカ領土（メキシコ割譲地で現在のニューメキシコ）に少し入った辺りで引き返して、またチワワに戻る（地図一）。テキサスとの国境に沿ってメキシコ北部からニューメキシコまでを巡回するような恰好だ。この遠征の途中で、一行は、サンタ・リタ銅鉱山の廃墟（the ruins of Santa Rita del Cobre）で野宿することにする（120）。19世紀初めごろ、ここは年600パウンドの銅を採掘する屈指の鉱山町で、チワワそしてメキシコシティーまで延びる一本道は、銅供給の重要なルートとして賑わっていた。そのため、白人と対立を続けるアパッチ族の格好のターゲットとなってしまった。きっかけは、アメリカ商人たちが報奨金目当てでインディアンの頭皮狩りに乗り出したことである。これへの報復として、1837年に、アパッチ族はサンタ・リタ鉱山町を襲い、300から400人の住民を皆殺しにしてしまう。鉱山は19世紀の北アメリカを代表する産業であり、栄華の象徴でもある。

その鉱山町全体が、アメリカの領土拡大とともに西域に追い払われ、流れ込んできたアパッチ族によって、一夜にして滅ぼされるのだから、「ソドムとゴモラ」の逸話を思わせる。ただし小説では、こうした歴史背景を一切説明しない。ただ襲撃された馬車の残骸などを配置し、おどろおどろしい雰囲気から、廃墟が辿ってきた悲劇を偲ばせている。

Glanton らは、このゴーストタウンの崩れかけた建物のなかで、アメリカ人鉱山掘りの一行を発見する。他の地域に向かっていたのだが、アパッチ族に追われて、逃げ込んでいたのだそう。彼らのなかに12歳ぐらいの少年がひとり交じっていた。メキシコ人かインディアンとの混血で、おそらく戦争孤児なのだろう。だが Glanton Gang が翌朝出発するとき、この子供が廃墟の一室で殺されているのが発見される（121-26）。誰もが口を閉ざしているが、Gang の副将 Holden 判事（判事は単なる愛称）の仕業であることは間違いない。彼は、Gang に所属していた実在の人物をモデルとしているが、小説では McCarthy の創作が多分に盛り込まれており、極めて知的で神秘的で残虐な人物となっている。身長は2メートルを超し、眉毛・まつ毛を含め全身の毛がなく、かつアルビノであった。紳士的で、あらゆる言語や考古学・地学・科学・哲学に精通していて、その言動は深淵で哲学的であるが、子供を好んで殺すなど悪魔的な側面がある。全ての点で超人間的であることから、彼は人類を破滅に導くサタンかメフィストフェレスとして登場しているのではないかと議論されるなど、“kid” に次ぐ第二の主人公として研究者の注目を集めている。しかしなぜ少年を殺したのかを含め判事の意図を推し量るのは本論の枠を超えるため、少年の遺体がおかれた状況だけを述べると、“He was lying face down naked in one of the cubicles. Scattered about on the clay were great numbers of old bones. As if he like others before him had stumbled upon a place where something inimical lived.”（126 [下線は筆者]）だったという。少年は、まるで怪物の住まう部屋に迷い込んだように、大量の骨とともに遺体となって発見される。これらの人骨群は、おそらく銅鉱山にたてこもった最後の住人たちであろう。少年の遺体を使って、鉱山住民たちが、絶滅され、「土（the clay）」へと還っていく姿に読者の視線をいざなう。まさに聖書で言うところの「ついに土に帰る、あなたは土から取られたのだから。（you return to the ground, for out of it you were taken）」（創世記第3章19節）である。

キリスト教文化では、人は死ぬと肉体は塵となり、大地に還ると考えられている。それゆえ、我々の踏みしめる大地そのものが死者たちで成り立ち、死者たちの記憶を宿すという思想に繋がる。例えば19世紀ロマン派の巨匠 George Gordon Byron は、“Churchill’s Grave”（1816）において、“For Earth is but a tombstone, did essay/To extricate remembrance from the clay”（「大地は墓石に過ぎないのだから／土（“the clay”）のなかから死者の記憶を解き放ってやりたかったのだ」[下線は筆者]）と述べている⁶⁾。つまり先のカトリック教会や鉱山の廃墟で幻想的に現れ出てくる人骨と、その血肉を取り込んでいった大地は、死者たちの墓石であり、記

憶だったということになる。

実は Gang 一行が鉾山廃墟に入る少し前にも、伏線として、大地に取り込まれていく遺骸について言及されている。Gang らが石膏の湖を越えていたときである。砂地はまるで白粉^{おしろい}のようにサラサラで、眼下に広がる砂漠では、風とともに砂が渦巻くのが見えた。その光景から、Gang のひとりが、メッカへ向かう巡礼者たちの逸話を思い出し、旅の慰みにと語り出した。出典を限定することはできなかったが、千夜一夜物語かペルシャ神話からだろう。その内容は、傭兵がおとぎ話を語り聞かせるというよりは、哲学的な詩をそらんじるかのごとく、こう続く。

some said they'd heard of pilgrims borne aloft like dervishes in those mindless coils to be dropped broken and bleeding upon the desert again and there perhaps to watch the thing that had destroyed them lurch onward like some drunken djinn and resolve itself once more into the elements from which it sprang. Out of that whirlwind no voice spoke and the pilgrim lying in his broken bones may cry out and in his anguish he may rage, but rage at what? And if the dried and blackened shell of him is found among the sands by travelers to come yet who can discover the engine of his ruin? (118)

巡礼者たちが、あの心無い竜巻に巻き込まれて、デルビーシュ⁷⁾の踊りのように、クルクルと空へ舞い上がり、砂漠に墜落した。骨は砕け、血を流して、なす術もなく、ただそこで、自分たちを破滅させた相手が、酔っぱらった魔人のごとくゆらゆらと通り過ぎ、元いたところに収まって、ただの砂に戻るのを見つめるだけだった。あの旋風のうちに声はかき消される。巡礼者は、骨を砕かれ、横たわったまま、叫ぶのだろう。苦痛にあえぎつつ、怒ったであろう。だが、誰に怒るというのか。彼は干からびて黒い殻だけになり、これから来る旅人によって砂のなかから見つけてもらえたとしても、彼が減びたいきさつに誰が気付くというのだ。⁸⁾

理不尽な最期を遂げて、人知れず死んでいく無念はいかばかりか。怨嗟の声は誰にも届かず、ただ死して砂漠の大地に取り込まれていくだけ。死者の唯一の願いは、後世の者たちに、大地のなかから自分たちの遺骨を見つけてもらい、減びの「いきさつ」を知ってもらうことであった。繰り返すが、McCarthy の幻想的な世界では、廃墟が減ぼされた文明の記憶を留める場所ならば、遺骸を取り込む大地は、減ぼされた者たちの記憶を宿していたことになる。

Glanton Gang は、ゴーストタウンからさらに北上して、サン・アグスティン平原に入る。そこは、有史以前から1500年ごろまで栄えた Anasazi 部族の古代遺跡が手つかずのまま残る土地であった。なかでも Gang たちが野営したのは、Anasazi 部族が溪谷の割れ目に断崖をくり抜いて作った住居群の廃墟であった（地図一）。いわゆる岩窟住居の遺跡はローマ遺跡のご

とき圧倒的な佇まいで、Anasazi 族が高度な文明と栄華を誇っていたことを物語っていた。そこには、円形集会所や用水路跡に、岩に描かれた壁画まであった。この壁画には、スペイン人たちが盾を持って馬上進軍してくる様子まで描かれており、コロンブスによるアメリカ大陸発見後まもなく、侵略にやってきた300年前のスペイン人たちに想いを馳せる⁹⁾。前出の Holden 判事は考古学への造詣が深く、熱心に廃墟のスケッチをメモに残していく。判事によると、Anasazi 族の文明が減んだ理由は分かっていないが、彼らは近隣のインディアンたちに今も崇められていて、夜眠りにつくころ、彼らの怒れる声が亡霊のように溢れ出てきて、人々を脅かすと言われているのだそうだ。なぜなら死んだ Anasazi 族の「魂は岩のなかに納められているからだ。魂は大地に宿り、その重みは減じることなく、あまねく存在し続けている」¹⁰⁾ という。つまり岩窟住居の遺跡は、まさに廃墟と大地が一体となった場所であり、その廃墟／大地は、減んだ文明の記憶を留め、減ぼされた者たちの恨みや無念を想わせる、巨大なモニュメントとなっていた。

ところが Holden 判事は、全ての遺物をスケッチすると、それらを壊して火にくべていく。なぜそんなことをするのかと仲間に尋ねられると、「人間の記憶から、これら全てを消し去るため」¹¹⁾ だというのだから、やはり悪魔のような男である。*The Last Man* の Lionel は、人類滅亡の際にあって、かつて栄えた己の文明を記録に残すことだけに唯一の慰みを見出した。この唯一の慰みを潰すかのように、判事は減んだ民族の記憶を消していく。記憶を消されれば、彼らは存在しなかったことになる。

ここまで見てきた廃墟が全てアメリカ領土内にあったことは偶然ではあるまい（地図参照）。前章で見てきたように“kid”を含む Glanton Gang ら義勇兵くずれは、アメリカ侵略軍の名残りであり、合衆国という巨大で残酷な文明を代弁する者たちであった。その彼らが奪い取った地で廃墟を巡るということは、自分たちが減ぼしてきた者たちの跡を、あるいはその前に減ぼされてきた者たちの跡を辿っていたことになる。つまり合衆国という新たな文明が古い文明を減ぼし、その古い文明もさらに古い文明を減ぼして、その屍のうえに栄えてきたという歴史を、大地／廃墟を通して連想・空想させる。しかしそれは、空想ゆえに幻想的で現実感はないが、確固たる史実であり、実際に起こっていたことだったのである。

5. Blood Meridian という記憶を引き継ぐ者たち

侵略者による廃墟巡礼の旅は、Gileños¹²⁾ というアパッチ族の一派を発見したことで山場を迎える。舞台は、地図一にあるように、国境を越えてテキサスに入ったところで、あえてアメリカ領内を選んだのには、作者の明確な意図が感じられる。そこで Gileños は、女子供を含む野営集落を湖のほとりに構えていた。人数は記されていないが、おそらく50人から60人はいた

のではないだろうか。その情報を斥候から受けて、Glanton Gang は夜明けとともに奇襲を仕掛ける。戦争のプロたちは、戦術にのっとって、馬で村のなかを駆け抜け、住民たちをライフルで撃ち殺していく。銃を持つ彼らは圧倒的に有利である。しかし銃がなければ圧倒的に不利となるため、弾薬を節約して、逃げまどう女子供たちはこん棒で殴り殺していく。その非情さに、地獄の悪魔たちかと見まがうが、実は彼らは効率を重視し、淡々と仕事をこなす漁師のようでもあったと小説では説明している。現実の侵略とは、実はこのようなものだったのかもしれない。インディアンたちは北方向に追われ、湖の岸で殺されていった。累々と並ぶ死体は、岸辺に押し上げられた難破船の遺体のようであったという。Gang たちは、これらの遺体の隙間を縫うように歩き、頭皮を剥いていく。そもそも集落を狙ったのは、一度にたくさんの頭皮を手に入れ、効率的に収益を上げるためである。まさに漁である。しかし、それゆえ、インディアンたちの血は大量に流れだして、湖を赤く染め、まるで大地全体が見渡す限り赤く染まったかのように見えた。

この幻想的な光景は、まさに大地が、滅ぼされた者たちの血を吸い取り、彼らの肉体と記憶を取り込んでいく過程を表象していた。作者の想像力では、血に染まる「赤い大地」は、滅んでいく部族たちの記憶であり、それを留める廃墟であった。

しかし Gang たちは、部族の生き残った戦士たちに追われることになり、夜を徹して馬を走らせることとなる。ついに夜明けを迎え、かすみが煙る朝日のもと、Gang 一行は、疲弊した体で、血の滴る頭皮を下げて馬を進める。その姿は、勝利軍というよりは、敗走軍のしんがりだが、“retreating across the meridians of chaos and old night” (172) だったという。これもまた、作者の幻想であり比喩である。“meridians” とは地球の子午線であるから、大地そのものを意味する。これを横切るとは、真西へ向かって歩いていったということだ。だとすれば東から昇る朝日が、彼らの背後から大地を照らしていたことになる。つまり“meridians of chaos and old night (いにしえよりつづく闇夜と混沌の大地)” を赤く染め、まるで大地が血を吸い込んでいくかのように見えたことだろう。小説のタイトル *Blood Meridian* とは、血に染まる「赤い大地」を指し、アメリカ西部の大地そのものが、滅ぼされた者たちの墓場であり、その記憶を宿した廃墟だったことを意図していた。

この「赤い大地」を引き継ぐのが、テキサス独立戦争と米墨戦争でこの地を制覇したものたち、アメリカ合衆国であった。*Blood Meridian* の偉大なところは、義勇兵くずれを通して、その背後に控える強大なアメリカ侵略軍を読者に想像させたことだけではない。アメリカ人が、この「赤い大地」を引き継ぎ、そこに眠る過去の人類・文明の記憶とともに立っていることを、広大な想像力で示したことである。このように読んでいくとき、McCarthy は明らかにイギリス・ロマン主義文学をアメリカにおいて引き継ぎ、北米大陸を旧世界ヨーロッパに比する文明と腐敗の大地として描いることも注目すべきである。

おわりに

Glanton Gang は、Gileños を滅亡させた辺りから、暴力的・破滅的な傾向に拍車がかかっていく。まるで狂ったコンパスのようになり、敵味方の別なく全てを襲うようになる。その様子に戦慄を覚えるが、あくまで史実であり、戦争と暴力に取りつかれた傭兵くずれの末路が現実問題として示されていた。チワワでは、Gang の暴走でインディアンから受ける以上の被害が出るようになり、彼らの討伐を決める。Gang はメキシコ軍にも追われ、1年後には落ち延びた先で対立していたアパッチ族に殲滅させられてしまう。侵略者側も滅びるという筋書きには、全てを終焉させたのちには、アメリカ共和制国家という理想の社会が訪れるとする19世紀の偽善的なアポカリプス思想を否定している。しかし、彼らに破滅を避ける道があったのだろうか。少なくとも、“kid” にはなかった。暴力的な血を受け継いだというひとつのきっかけから、時代の波に流されて、仕方なく戦争を覚え、それゆえ追われていく。これが、義勇兵くずれという時代の申し子たちの実話を元にしていたことを考えると、人間の自由意志と運命について考えさせられるが、紙面の関係上割愛する。いずれにせよ“kid” は、アメリカ民主主義の象徴 Huck を模して造形された登場人物である。その“kid” が、最後は滅んでいくという筋書きには、アメリカ文明もまた滅びる日がくることを示唆している。まさに壮大なアポカリプスの物語ではないだろうか。

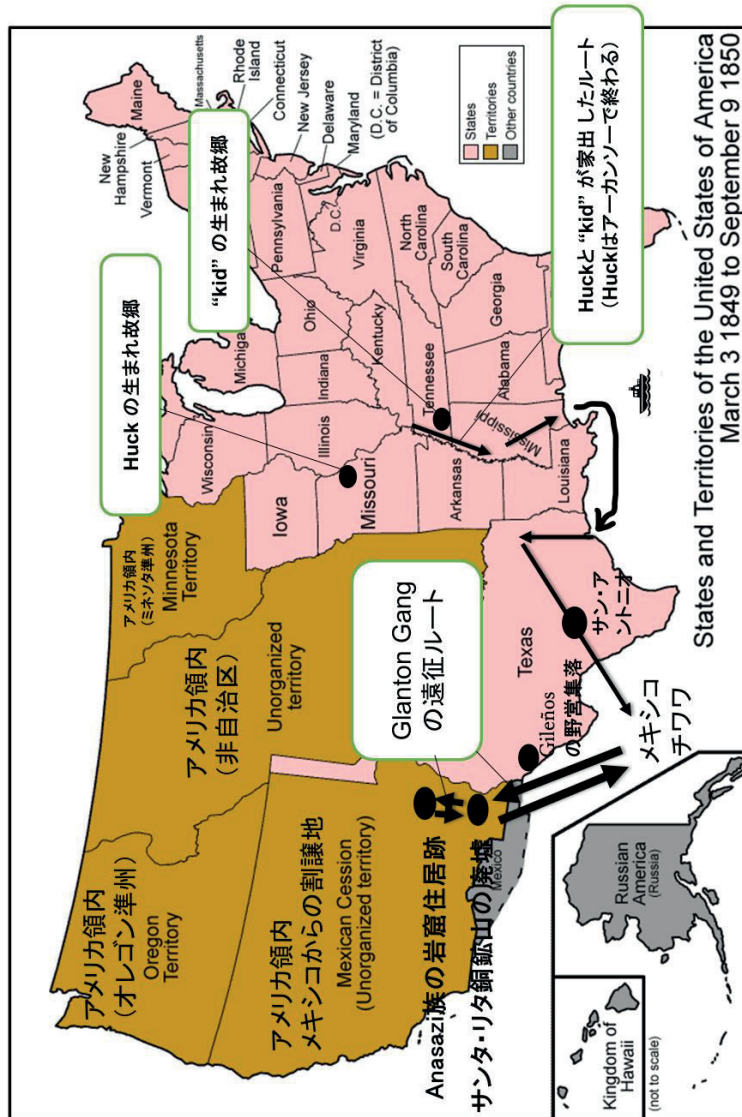
小説の「エピローグ」で、何の脈絡も説明もないまま、平原に点々と穴を掘る男が登場する。作業員が電報用ケーブルを設置しているところであろう。19世紀は地下に引かれることも多かったからだ。電報は19世紀アメリカの科学技術と覇権主義の象徴である。領土拡大とともに、電線も延びていく。この電線用の穴に沿って、放浪者たちがついてくる。穴のなかから骨を拾う者と、拾えない者がいる、と記されている。骨は何か再利用できるらしく、拾い集めて売るつもりなのだろう。くず拾いの一種である。だが人間が大地（領土）のなかから骨を拾うという構図は、「赤い大地」に埋まる死者たちの記憶を、つまり滅亡した国家・文明・民族の記憶を拾い出す姿と重なる。「赤い大地」は、旧世界ヨーロッパに比する文明と腐敗の大地であり、New World などではなかった。だからこそ、人類はアメリカ人を含め侵略と滅亡を繰り返すという冷徹な歴史観を持つ McCarthy にとって、記憶を留めることだけが、死者と生者を結ぶものであり、両者にとっての唯一の救いになると考えていたのではないだろうか。滅んだものの記憶を失えば、それらは最初から存在していなかったことになるからだ。

Blood Meridian はまさに「赤い大地」に刻まれた滅びの記憶である。夢か現か計り知れないアポカリプスの物語として描く手法は、明らかに19世紀ロマン主義文学の伝統を受け継いでおり、人類全体への深い思索が反映されている。国家や権力者の栄誉を称える叙事詩や建国神話ではなく、アメリカ巨大文明の終焉を予言する啓示（アポカリプス）として見るとき、正義

と悪、生と死、征服者と被征服者といった短絡的な視野を越えた哲学が読み取れる。

謝辞

本研究遂行にあたり、日本学術振興会、科学研究費助成事業（課題番号 22k2042）の助成を受けたものである。ここに厚く御礼を申し上げる。



地図一（アメリカ・ドメインの
地図上に筆者が書き込み）

注

- 1) 作品からの引用は、全て*Blood Meridian or the Evening Redness in the West* (Picador Classic, 2015) からとする。
- 2) 本稿は、拙論「*Adventures of Huckleberry Finn* における21世紀新解釈への提言」を出発点として展開するものであり、「“kid” は・・・途中で終わった Huck の旅を引き継ぎ」いだという指摘は、先の拙論において証明した。
- 3) 本稿は、拙論「*Adventures of Huckleberry Finn* における21世紀新解釈への提言」を出発点として展開するものであるため、米墨戦争の説明についてのみ、先の拙論から転用であり、重複している。
- 4) Foosは、自著の第6章において、“Atrocity: The Wage of Manifest Destiny” というタイトルのもと、1章を割いて義勇兵たちのメキシコでの犯罪や非道ぶりについて説明している (113-137)。
- 5) 事実、Thomas Cambellの“The Last Man” (1824) と Thomas Hood の“The Last Man” (1826) という同名作品がほぼ同時期に発表されており、いずれもアポカリプス (世界の終末) を描いている。
- 6) 藤井仁奈が「巧みな語り手——バイロンの『闇』をめぐって」において、George Gordon Byronが、「死を描く際によく用いることばのひとつが、『土塊』である」(43) として、“Churchill’s Grave” の19-25行を引用しており、本論のByronにかんする論旨及び引用は、これを下敷きとしている。
- 7) イスラム教徒で神秘体験を得るため、激しい旋舞などの法悦的儀式を行う修行者のこと。従って、極めて激しい舞をする人を指す。
- 8) McCarthy の文章は非常に難解であるため、私訳を付した。
- 9) ニューメキシコを含めた西部には、Anasazi 族の古代遺跡がいくつか残っているものの、サン・アグスティン平原で Anasazi 族の遺跡は発見されていないため、ここに登場する遺跡のみ McCarthy のフィクションである。
- 10) 同様に McCarthy の文章は難解であるため、文意を損なわないため私訳を付した。原文は “Here are the dead fathers. Their spirit is entombed in stone. It lies upon the land with the same weight and the same ubiquity.” (153) となっている。
- 11) 同様に McCarthy の文章は難解であるため、文意を損なわないため私訳を付した。原文は “it was his intention to expunge them from the memory of man.” (148) である。
- 12) 英語ではChiricahuaと呼ばれている部族で、スペイン語では Gileños と呼ばれていた。数十人規模の野営集落を形成していた。

引用文献

Abe, Miharū. “Mary Shelley’s Heterogeneous Philhellenism in *The Last Man*.” *Voyages of Conception: Essays in English Romanticism*. Japan Association of English Romanticism, 2005, pp. 360-73.

- DeVoto, Bernard. *Mark Twain's America*. U of Nebraska P, 1997.
- Foos, Paul. *A Short, Offhand, Killing Affair: Soldiers and Social Conflict During the Mexican-American War*. The U of North Carolina P, 2002.
- Holt, Marilyn Irvin. *The Orphan Trains: Placing out in America*. U of Nebraska P, 1994.
- McCarthy, Cormac. *Blood Meridian or the Evening Redness in the West*. Picador, 2015.
- Oberly, James W. "Military Bounty Land Warrants in the United States, 1847-1900." 17 Feb.1992. *ICPRS*.
<https://www.icpsr.umich.edu/web/ICPSR/studies/9514>. Accessed 22 March 2023.
- Paley, Morton D. *Apocalypse & Millennium in English Romantic Poetry*. Oxford UP, 1999.
- Richardson, William H. *The Mounted Volunteer: A Diary of a Private of Missouri Mounted Volunteers on the Expedition to California, 1846*. Oakpast Ltd, 2010.
- Sepich, John. *Notes on Blood Meridian: Revised and Expanded Edition*. U of Texas P, 2008.
- Shelley, Mary. *The Last Man*. Oxford UP, 1998.
- Twain, Mark. *Adventures of Huckleberry Finn*. U of California P, 2010.
- 阿部美春「起源神話の再創造：メアリ・シェリーの『最後の人間』」『想像と幻想の世界を求めて—イギリス・ロマン派の研究』大阪教育図書、1999年、p. 235-54。
- 谷川渥『廃墟の美学』集英社、2003年。
- 藤井仁奈「巧みな語り手——バイロンの『闇』をめぐって」『文学部紀要』文教大学文学部、第29-1号、p. 35-57。
- 山口和彦『アメリカ文学との邂逅 コーマック・マッカーシー 錯綜する暴力と倫理』三修社、2020。
- 山本祐子「*Adventures of Huckleberry Finn* における21世紀新解釈への提言—米墨戦争と Volunteers の呪い」『関西外国語大学 研究論集』117号、p. 31-48。

(やまもと・ゆうこ 短期大学部准教授)